

## 平成20年度「専修学校教育重点支援プラン」成果報告書

事業名	専門知識修得を目的とした知識獲得力の体系化と強化プログラムの開発・実証		
法人名	学校法人コンピュータ総合学園		
学校名	神戸電子専門学校		
代表者	理事長 福岡 富雄	担当者 連絡先	油谷 元洋(あぶらやもとひろ) 078-242-0014

### 1. 事業の概要

本事業では、「知識獲得力」を強化するための教育プログラム及びそれを実施するeラーニングシステムの開発を行い、その有効性や妥当性の検証を目的とする実証実験を行った。また、教育プログラムの設計・開発に先駆けて、専門学校生の「知識獲得力」に関する実態調査を行うと共に、「知識獲得力」の強化に有効な方法論に関する情報を収集・整理した。

なお、本事業でいう「知識獲得力」とは読解力と体系化力を核とする学びの力である。この教育プログラムを従来からの専門技術教育との組み合わせることで相乗効果を生み出し、より高度な実務能力を効果的に練成することが事業の狙いである。

開発後に行った実証実験の検証結果では、教育プログラムが「知識獲得力」の強化に有効であるという感触を定量的側面及び定性的側面に確認することができた。

### 2. 事業の評価に関する項目

#### ①目的・重点事項の達成状況

本事業で定義する「知識獲得力」は、学生の主体的な学習活動において強化が図られるという意図から、それを支援するコンテンツとeラーニングシステムを構築した。ここでは、学生自らが文章を読解・理解し、求めに応じて書籍やWebサイトから情報を得るなどして自分意見や考えをまとめて表現する、更には他者の意見や回答を見て再考・再表現するという仕組みが実装されている。これにより、当初狙いとしていた主体的な学び「知識獲得」を支援する環境の基礎は十分に形成できたと考えられる。また、実証実験の結果から、このような環境や学習方式が大半の学生に受け入れられ、「知識獲得力」の向上にも効果があることが確かめられた。

#### ②事業により得られた成果

eラーニングシステムを活用した教育プログラムが大半の学生に肯定的に受け入れられ、活発な自主的学習の取り組みが行われたことは大きな成果である。例えば、実証実験後に行った学生アンケートでは、「教育プログラムは学習効果がある」「他の学生の回答や意見の閲覧・参照が有益だった」と回答した学生はいずれも全体の65%以上であった。ある演習課題の回答に対する閲覧回数は933回(学生数は35名)で、学生相互の学習が活発に行われたことがここでも示されている。また、担当教員からも多くの学生が意欲的に取り組んでいたと評しており、全体として事業の計画段階で想定していた以上の成果を得ることができた。

また、実態調査の一環として、専門学校生の文章力の現状を捕捉すべく日本語能力検定試験を神戸電子専門学校の1年生約170名に受験させた。文章力は「知識獲得力」の重要な要素であり、教育プログラムの開発に際して、これを把握することが肝要と考えられたためである。その結果、読解力はほぼ全国平均水準にあるものの、自分の意見を述べるなどの文章表現力には問題があることが明らかとなった。限定的ではあるが、専門学校生の文章力を定量的に把握できたことも、今後の教育的取り組みの在り方を考える上で貴重な成果のひとつである。

### ③今後の活用

本事業によって、教育プログラムとそれを支援するeラーニングシステムの有効性や可能性を確かめることができたので、今後はその内容や機能の拡充を継続しながら活用を図っていく計画である。今回は、ソフト分野の学科において実証実験を行い良好な結果を得たが、この教育プログラムとeラーニングシステムにどの程度の汎用性があるのか、他の分野や学科などでも効果的な利用が見込めるのかといった点については検討が必要だが、可能な限り水平展開を進めていきたい。

### ④次年度以降における課題・展開

教育プログラムとeラーニングシステムを活用していく上で課題となるのは、大きく以下の3点である。第一は「知識獲得力」の向上の評価方法の検討である。実証実験でもそのトライアルを行ったが、充分とは言い難く、多面的な議論が不可欠である。また、教員の指導方法の在り方についても検討が必要である。教員の意識も含め、知識・技能伝達中心から学習支援・助言中心のファシリテーションを具体的にどう実践すべきか、という点も重要な課題である。最後はeラーニングシステムの機能と運用の見直し・改善である。これらについては、上記の述べた水平展開の推進と並行して解決を図っていくのが現実的と考えられる。

## 3. 事業の実施に関する項目

### ①ニーズ調査等

近年、公的・学術的な調査研究の結果から、若年層における文章力の低下がしばしば指摘されている。文章力は「知識獲得力」の重要な要素であることから、専門学校生の文章力の現状を把握することを目的に、日本語文章能力検定試験(3級)を神戸電子専門学校の1年生約170名に受験させることとした。その結果、読解力についてはほぼ全国平均と同等の力量があるが、PISA調査の結果と同じく自己の意見を述べるなどの表現力については問題があることが明らかとなった。

この結果を踏まえ、論理的な文章の構想・組み立てや表現の力を育成するための方法論に関する情報の収集と整理を行い、教育プログラムの内容を検討する上での参考資料としてまとめた。

### ②カリキュラムの開発

本事業では「知識獲得力」を読解プロセスと体系化(再構成と表現)プロセスという一連の流れに基づく学びの力と定義した。この「知識獲得力」の強化では、これらふたつのプロセスの一体的な訓練が有効であるという観点から、学習コンテンツと学習支援機能を実装したeラーニングシステムを構築した。具体的には、論理的な文章を読解した上で要約文や自らの考えなどを表現する演習課題をBBS上に複数アップし、学生がこれにBBSの中で回答したり、他の学生の回答・意見などを閲覧・評価したりできる仕組みを作った。設定した演習課題は、IT業界の動向や自己PRの考え方など、就職活動に直結する内容を中心に構成した。このような内容とした第一の理由は、教育プログラムの利用が科目「キャリアデザイン」であったためであるが、直観的な実益性をもたらす学習意欲の喚起・動機付け効果を狙ったことも大きな理由のひとつである。

この教育プログラムでは、「知識獲得力」は学生の主体的な取り組み(読解し表現する、他者の意見や回答を見て再考・再表現する)において強化されるという意図のもと、教員は、学生の自主的な学習活動の側面支援に徹するファシリテータという役割を担う。

### ③実証講座

開発した教育プログラムとeラーニングシステムが「知識獲得力」の強化に有効であるかどうかを検証することを目的とする実証実験を行った。

対象者は神戸電子専門学校ソフト分野情報処理科1年生(35名)、期間は平成21年1月下旬から2月中旬までの約3週間、正規の授業科目である「キャリアデザイン」において行った。期間内の授業回数は計5回(50分/回)だが、放課後も実習室を開放し、授業時間外もeラーニングシステムを利用できるようにした。

実証実験の検証は、学生に対するアンケート、担当教員へのヒアリング、学生の成果物の事前・事後評価、eラーニングシステムの利用状況分析(ログ分析)という複数の方法で行った。

学生アンケートや担当教員ヒアリングの結果では、教育プログラムの有効性や学習効果への期待、学びのスタイルなどについて非常に良好な感触が確かめられた。また、短期間での実施であったにも関わらず、一部の学生において事前と事後に明確な「知識獲得力」の変化が認められた。これらを裏付けるように、eラーニングシステムの利用頻度は高く、活発な学習活動が期間内に行われたこともわかった。

#### ④その他

##### ○成果報告会

平成21年2月24日～25日に開催された「専修学校フォーラム2009」(主催:全国専門学校情報教育協会)の初日の全体会において、本事業の取り組み内容、成果などについて発表(50分の講演)を行った。